Architectural Institute of Japan

9163

日本建築学会大会学術講演梗概集
(北海道) 1995 年 8 月

文学の中の建築・研究の考え方　文学の中の建築　その3

○正会員　若山　滋[*1]
同　張　奕文[*2]
同　近藤　正一[*3]
同　早瀬　幸彦[*2]
同　鈴木　雄一郎[*4]
同　中川　景子[*4]

・建築の意味

建築を「意味」として捉えようとするときには、その意味を表出させる、ある「文化の系」を設定することが必要であると思われる。機能という近代主義的なパラダイムを超えて、建築空間の意味を探ろうとする際に、言語学的な意味論、構文論が注目されるのは当然で、一頃はこの言語学や記号論の概念を借りた議論が多く見られたが、私はそういった理論の展開からさらに、ある具体的な場を設定して、空間の意味を探ることが重要であり、その地道な作業の進行のうちにまた新しい具体的な論理が展開される可能性があると考える。

建築の意味には二つの側面がある。一つは建築を「形象」として捉えることで、このとき建築の意味は、心理学的な象徴論及びゲシュタルト論、美術史的な図像学（イコノロジー）と類似した概念となる。もともと宗教建築は多くの象徴的形象に覆われており、むしろ建築とは、一面においてそういった象徴を恒久空間化することによるメディアであった。もう一つは建築を「空間」として捉えることで、これは往々にして奥ー表、内ー外、中心ー周縁などの概念をもって語られ、動物行動論や社会領域論あるいは文化人類学と結びつく傾向にあり、現代建築においても機能とは別の重要な空間概念となっている。

哲学的な立場から、空間や物の意味を論じた例としてはG・バシュラールやJ・ボードリヤールが、建築的な立場からの例としてはC・N・シュルツなどがあげられる。「フロイトは患者を精神分析したが、バシュラールは物体を精神分析した」と評されるように、彼らの仕事は精神分析に似ている。しかしフロイトやユングが対象とした人間の心理は、そのまま普遍的なものと捉えられるが、物や空間の意味は、ある特定の文化の系において浮かび上がるもので、彼らの論理はどうしても西洋文化を、あるいはそれを基本にした近現代文化を前提として、その原型を古典や未開の文化に求めるか、もしくは具体的な文化の系をもたない哲学的総論にとどまる傾向があった。

・文学というテクスト

われわれが「文学」を分析対象とするのは、文学を、建築の意味を浮揚させる「文化の系」として設定できるのではないかと考えるからである。小説でも歌集でも、ある種の文学的まとまりとしてのテクストを、ある文化の系における意味の場と捉える。一つのテクストを場と捉えることも可能であるが、複数のテクストを場と捉えることも可能である。

文学はもちろん書き手の意思によって成立するのであり、テクストからその書き手の「意思」を一つの心的世界として読みとることもできるが、書き手は、ある文化状況の中で、比較的多数の読み手を想定して書くもので、これはある意味で共同作業であり、作品は発行された時点で、書き手の意思を離れてその社会に共有される「記号の系」となる。複数のテクストを意味の場と捉える場合は、それがある程度、その時代と社会を表現するものと考えることもできるが、それでもそのテクストの集合に自ずから存在する「場」の偏りと限界を明瞭に規定する必要はあろう。

しかも文学の中に登場するのはその時代と社会の実空間ではないということを意に留めておく必要がある。文学の中に姿を現すのはあくまで虚構の空間であり、人あるいは人々の心象の空間である。われわれは、その時代と社会の実空間を推定する史料として文学をも利用しようというのではない。むしろそこに現前するのが心象の空間であるからこそ、そこに「意味」を読みとろうとするのであり、紫式部が『源氏物語』の中で光源氏にいわせている、むしろ文学という虚構の中にこそ人間の真実が現れるという「物語論」のように、虚構の空間だからこそ、そこにその文化的な意味の本質が現れるという立場である。歴史的な実空間あるいは絵画的彫刻的図像のような視覚的空間が、人間の顕在的な意識の空間だとすれば、文学の中に現れるのは人間とその社会の潜在意識もしくは無意識の空間である。

文学の中に発見されるのはまず「言葉」であり、その連続としての「文脈」であり、まとまりのあるテクストとしての「作品」である。そのそれぞれが「意味」を指し示し、われわれにとっては「空間」を指し示す。つまりわれわれは建築という記号の意味を探るのに、言語という記号系の中に飛び込むのであって、ここで「言葉」と

Architectural space in literature-theoretical approach
Architectural Space in Literture part.3

WAKAYAMA Shigeru et al.

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

「空間」は、相互にシニフィアンでもありシニフィエでもあるという可逆関係で結ばれる。

・言葉と空間

『万葉集』から始めた研究の中で、最初に注目されたことは、遺構や史料から推測されるその時代の都市・建築の状況と、文学の中に現れる都市・建築の様相との「ズレ」である。文学は、そのままその時代の都市と建築の実空間の状況を示すのではない。そこにはもう一つの都市があるといってもいい。むしろ文学の中に現れる空間は、その時代の現実の社会が向かっている方向とは逆の方向性を有する傾向がある。それは「文学とは、権力の外の言語を聴き取らせる、健全なごまかし、肩すかし、壮麗な罠」というロラン・バルトの見解に符合する。文学は往々にして、時代の趨勢に乗り切れない人々の情念を吸収する。それは社会が動くことによって生じる「取り残される情緒的反動」のエネルギーを与えられている。現実社会の空間と文学の中の空間とのズレに、時勢あるいは制度というベクトルの上にある空間と、郷愁あるいは逸脱というベクトルの上にある空間の対極的構造が見られる。

二番目に注目すべきことは、言葉と空間は必ずしも一対一の対応を示さないということである。一つの言葉が多くの指示内容をもつことは別に珍しいことではない。記号は常に多義的であるといってもいい。しかし一つの空間が複数の言語表現をもつことには注目すべきである。そこに存在するのは直接的な意味の差異ではなく、文脈の差異なのだ。日本語は同意の人称代名詞が多様であるように、指示対象の差異によってではなく、それが言表される文脈の差異によって言葉を選ぶ傾向がある。これは古くから存在する漢語とやまと言葉の二重性、あるいは同じやまと言葉でも北方系と南方系の二重性、あるいはまたその文化自体の性格にもよるのであろうか。

三番目に注目すべきことは、言葉と空間の相互投影という現象である。具体的空間がそれを指示する言葉を生むのは当然であるが、時として、言葉が空間に投影される、あるいはそれに該当する実空間を生むという現象が見られる。言葉を空間という対象を指示する記号であると考えればそれはある種の遡行現象であるが、建築空間は言葉で表現されるべき意味の表徴である、つまり空間自体の記号性を考えれば、これは先に述べた「言葉」と「空間」の可逆関係に帰着する。そしてそこに私は「文脈」と「様式」というものの役割を想定することができるような気がする。様式は一種の集合表徴である。トーテムという集合表徴は「モノでもありシンボルでもある」というレヴィ＝ストロースの解釈を借用すれば、文脈と様式を言語と空間の媒介項として設定することが可能なのではないか。様式は言語を空間に投影し、文脈は空間を意味として構成する。

・図と文（言葉）

文学の中に登場する建築を図として表現する試みを、ある出版社から勧められている。例えば『源氏物語』に出てくる六条院や、『吾輩は猫である』の苦沙弥家などは、その建築の在り様が比較的ていねいに描出されているので、これに想像を加えて適当に図を描くことは必ずしも不可能ではない。事実、他の人の手によってそういった試みがなされてはいる。が、結果はあまり充実したものとはなっていないのではなかろうか。

実のところ、文学は建築の物理的な空間をあまり語らない。文字という記号は、われわれがいつも図に描いている空間の構造やディテールをあっさりと切り捨てている。その切り捨てと沈黙こそが文学空間の本質であり、それを無理に図化することは、むしろ文学を冒涜することになるように思える。考えて見れば文字というものは、描かれた表現体からその図像性を捨象するところにこそ成立する記号なのだ。しかし文学は、空間の物理的な詳細を切り捨てる代わりに、空間の文化的心情的な詳細をその文脈のうちに豊饒に表現する。つまりこれを図化することは、逆にそこに表現されていた文化的心情的「意味」を削ぎ落としてしまうことになるのだ。それでは文学の中の建築という視点を取った意味がない。要するに図と文字とでは、表現する対象が異なるのである。

・領域と様式

例えば前田愛や山口昌男の著作に見るように、哲学、批評、文化人類学などの分野からの空間論は、都市の中心と周縁、建築の内と外、といった「領域論」に収斂する傾向があるが、われわれの研究から浮かび上がってくるのは、それとともにその建築の様相であり「様式論」である。それは彼らが、多く都市領域論から出発し、実際の建築様式の詳細には通じていないことと、われわれが建築の専門家であり、私自身がこれまで構法を様式として捉える研究を続けてきたことにもよるのだろうが、実はこのことが西洋を中心とする普遍的な知と日本文化に対するスタンスに関わってくるような気がする。実際に日本文学に現れる空間は、古代から近代に至るまで、領域概念が希薄であり、様々な表徴、様式、情緒に覆われている。日本文学には、ある種の共同幻想ともいうべき「様式的感情」が発見できる。

いずれにしろ「文学の中の建築」空間は広く柔軟であり、様々な読み方が可能である。

*1　名古屋工業大学教授・工学博士　Prof., Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.
*2　名古屋工業大学大学院博士後期課程・修士（工学）　Dr's course,Nagoya Institute of Technology,Master Eng.
*3　名古屋工業大学助手・修士（工学）　Asst,Nagoya Institute of Technology,Master Eng.
*4　名古屋工業大学大学院博士前期課程　Master's course,Nagoya Institute of Technology

NII-Electronic Library Service